

東書教育賞は教育現場を 支援します



代表取締役社長

川畑慈範

おはようございます。紹介のございました東京書籍の川畑でございます。主催者を代表いたしまして、お祝いとご挨拶を申し上げます。

第30回東書教育賞を受賞された先生方、誠にありがとうございます。心よりお祝い申し上げますとともに、本日は公私ともご多忙の中、休日にもかかわらず、ご遠方より贈呈式にご出席いただき、厚く御礼申し上げます。

また、今回受賞された先生方はじめ、本教育賞にご応募いただいたすべての先生方に感謝申し上げますとともに、先生方の日頃の弛まなご実践とご研究に心より敬意を表する次第でございます。

振り返ってみますと、昨年も年初から年末まで、休む間もなく次々と「教育改革」が打ち出された1年でした。

通常国会の期末の6月には、改正地方教育行政法が成立し、新たな教育委員会制度が実現しました。また、一昨年、教育再生実行会議で提言された道徳の教科化は、すでに実施までのスケジュールが明らかにされています。同じく教育再生実行会議が提言（第5次提言）した小中一貫教育学校や大学入試改革も、中教審への諮問から短時日で昨年末、12月22日に答申されました。これらの制度の見直し、改革については、そのテンポの速さに現場がついていけるかどうかを懸念する声もあります。

昨年は、こうした制度面の改革に加えて教育

内容面でも大きな動きがありました。

11月20日に、文科大臣が学習指導要領の改訂を中教審に諮問しました。これまでと異なり、教育目標・教育内容だけでなく、学習方法・指導方法や評価の在り方との一体的な見直しを要請しています。

また、中教審が小中一貫教育学校の制度化と同時に答申した「高大接続改革」も大きな波紋を投げ掛けています。今後、紆余曲折が予想されますが、「知識偏重の大学入試が変わらないと、高校以下の授業は変わらない」と言われ続けてきた我が国の初等中等教育を大きく変えることに繋がる動きです。

こうした「教育改革」の陰に隠れてあまり大きな話題にはなりませんでしたが、6月にOECDの「国際教員指導環境調査」(TALIS)の結果が公表されました。この調査は、学校の学習環境と教員の勤務環境に焦点を当てた国際調査で、日本を含む34か国・地域が参加しています。

今回の調査では1週間当たりの教員の仕事時間は、日本が参加国中最長で、参加国の平均の1.4倍です。その一方で、授業（指導）に使った時間は、参加国平均を下回り、一般的事務業務に使った時間は、参加国平均のほぼ2倍でした。その他に、課外活動の指導に使った時間が参加国平均の3.7倍という結果でした。

この調査からも分かるように、日本の先生方

は長時間労働でありながら、授業で子どもと向き合う時間が少ないというのが現状です。

「授業で勝負する」ために必要な教材研究や授業準備の時間が、学校運営業務や一般的な事務業務や課外活動の指導に割かれている現状を一日でも早く解決しなければならないと思います。すでに各都道府県教育委員会では、先生方の勤務負担軽減の取り組みが行われていますが、抜本的な解決には至っていないのが現状です。

本日受賞された先生方は、そうした厳しい環境の中で、一所懸命に教材研究や授業改善に取り組まれ、その成果を論文としてまとめられた優れた実践者でいらっしゃいます。東書教育賞は、このことを多くの方に知っていただき、優れた実践を少しでも広めたいとの思いで始めました。

先程ご紹介したTALISでも、研修で他校の授業を見ると答えた教員の割合は、日本は参加国平均の2.7倍で、ダントツの1位です。日本

の教育では先生同士が学び合い、支え合い、高め合う組織文化が根付いていると言われます。

本教育賞は1985年（昭和60年）に始まって今回で30回を数えますが、これだけ長い間続けることができましたのも、そうした日本の教育界独特の組織文化があつてのことだと思えます。是非ともこの良き文化を守り続けていただきたいと思えます。

最後になりましたが、公私ともご多忙な中、最終審査をご担当いただきました審査員の先生方、一次審査をご担当いただきました東京教育研究所主任研究員の先生方はじめ多くの先生方に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

また、本日ご出席いただきました報道関係者の皆様方に感謝申し上げます。簡単ではございますが、ご挨拶とさせていただきます。

受賞された先生方の今後ますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。本日は誠におめでとうございます。